

歌・ノレㄴ레 164

『木浦の涙』

大和泰彦

久々の「歌・ノレㄴ레」、初めて担当させていただきます。今年のもくげの会新春合宿はテーマを「木浦の涙」と題して木浦へ行った。「木浦の涙」と言えば、個人的に元々大の演歌好きであった私が中学生の時に初めて原語で覚えた歌であり、韓国・朝鮮歌謡へのめり込むきっかけとなった記念すべき歌である。しかし不思議なことに今まで「歌・ノレㄴ레」コーナーで「木浦の涙」が一度も取り上げられていない。



「木浦の涙」(作詞 文一石・作曲 孫牧人・歌 李蘭影)は日本統治時代の1935年に発売され、朝鮮全土で一躍大ヒットし、湖南地方の南端に位置する港町木浦を全国的に知らしめた。そして木浦出身で当時10代後半だった新人歌手の李蘭影は一気にスター歌手へと上りつめた。

船頭の舟歌 川面に霞み  
三鶴島波深く 消えるのに  
埠頭の新妻 濡らす裳裾  
離別の涙か 木浦の悲しみ

三百年恨み懐に 露積峰下に  
あなたの影はつきりと 切ない情  
儒達山風も 栄山江を抱き  
あなた恋しく泣く心 木浦の唄

夜明けの三日月は 流れ行くのに  
時に昔の傷が 新たにされるのか  
来ないあなたなら この心も送るものを  
港に結んだ 木浦の愛

歌詞を一見すると、木浦を舞台にした別れのラブソングのように感じられるが、日本の植民地下で苦悩した朝鮮民族の悲哀が所々に散りばめられている。

木浦をはじめとする湖南地方は朝鮮半島有数の穀倉地帯であり、また綿花の山地としても有名である。木浦は特産物を集積し運び出す港湾都市として、現在とは違い非常に栄えた港町であった。その米や綿花はほとんどがこの木浦港から日本へと運搬された。多くの朝鮮の農民

は自分達が育てた米を口にするには許されず、僅かな穀物とボロボロの衣服で困窮した生活を送らざるを得なかった。日本によって土地を搾取された彼らの中には、生活の糧を求めて異郷へと出稼ぎや流浪の旅に出る者も多かった。「木浦の涙」の舞台である木浦の港はこのような人々の肉親や恋人との悲しい別れの場として象徴された。このような光景は朝鮮半島のどの港でもあっただろうし、仁川港でも興南港などでも同じような離別のドラマが現実として展開されていたことだろう。この民族的な悲哀が込められた歌詞が当事者である朝鮮民族の琴線に触れ、全国的な大ヒットにつながった。

特に2番の「三百年恨み懐に 露積峰下に～」の300年とは豊臣秀吉による朝鮮侵略(壬辰倭乱)からの300年を意味している。露積峰は儒達山の別名で、壬辰倭乱の時に李舜臣率いる朝鮮軍が儒達山を露積(穀物の積載)に仮装し、日本軍は進軍に苦勞したという。これらから日帝に対する強烈なほどの抵抗の歌とも理解することが出来る。



「木浦の涙」は発売直後に総督府の検閲に引っかかり「三百年の恨みとは何事か?」と尋問され、作曲者の孫牧人は「怨恨(ウオナン)」を「鴛鴦(ウオナン)」と譬え、深い愛情を表現したと説明し何とか検閲を抜けることが出来たそうである。

作詞者の文一石は早稲田大学を卒業した20代の青年で、朝鮮日報とオーケーレコードが「第1回郷土賛歌」を募集し見事一等で当選した。その詞に孫牧人が曲をつけ、当時は地方新民謡という触れ込みであった。



この歌を歌った李蘭影は本名を李玉禮といい、1916年に木浦で生まれた。幼少期は病弱だったが、次第に歌手を目指すようになり太陽劇場に入団した。1933年にはオーケーレコードの専属となり10月に「郷愁」、11月に「不死鳥」を歌いデビューした。翌1934年には「春迎え」がヒットし、日比谷公会堂で開かれた「全国名歌手音楽大会」に朝鮮人歌手として唯一出演し大きな拍手を受けた。19歳になる1935年には「木浦の涙」の大ヒットで一躍スター歌



手となり「歌謡の女王」と呼ばれた。なおB面の「春娘」もヒットした。1936年から38年にかけて岡蘭子の名前でテイチクレコードから日本語のレコードを出している。並行して1937年に「海鳥曲」、1939年に後に夫となる作曲家金海松が書いたジャズ風の「茶房の青い夢」をヒットさせた。翌1940年には「泣けよ門風紙」、「船夫の妻」、「つつじ詩帳」、木浦のもう1つの名曲「木浦は港」等をヒットさせた。

解放後は大きなヒット曲こそないが夫の金海松率いるK・P・K楽団で活躍した。しかし1950年に朝鮮戦争が勃発し、夫が北朝鮮の人民軍に逮捕され再び会うことはなかった。楽団を再建し歌い続けるものの運営は芳しくなかったという。いつしか歌手の南仁樹と恋愛関係になるが、南も1962年に肺結核で死去。晩年はアメリカで金シスターズ、金ブラザーズとして活躍していた息子と娘の誘いで一時渡米したが、帰国後は酒に溺れ1965年、49歳の若さで波乱の生涯を終えた。



今回の木浦の旅で、初めて儒達山の中腹に建てられた「木浦の涙」の歌碑を見に行った。この歌碑は李蘭影の没後4年の1969年6月10日に竣工しており、「生きた宝石は涙です。南の空の下夢と愛の実をここに植えます。李蘭影の歌が文一石の歌詞、孫牧人作曲によりここに清湖の魂のように輝いています」と刻まれていた。李蘭影のヒット曲がエンドレスで流されていた。他に興味深いものとして1935年発売当時の歌詞と2001年の歌詞の変遷が説明されていた。やはり前述の2番の冒頭の歌詞の意味合いが異なっていた。他、言い回しが今様々な歌手によって歌われているものと多少変わっていた。



↑ 歌詞の変遷について

歌碑と私 →



現在、1番の歌詞に登場する三鶴島は埋め立てが行われ歩いて行ける。木浦駅や漁港からも比較的に近い三鶴島の一角に「歌手李蘭影公園」が整備され、もう1つの歌碑があるとの情報を聞いた。行ってみると木浦港を一望できる小高い丘の上に公園があった。私の他に誰も人がおらず少し寂しい気もしたが、「木浦の涙」、そして「木浦は港」の歌碑が並んで建っていた。碑が建てられたのは2006年3月25日で「李蘭影記念事業会」によると記されていた。歌碑の裏には李蘭影の生涯について説明されていた。



↑ 李蘭影公園

↓ 木浦は港



木浦の涙 ↑

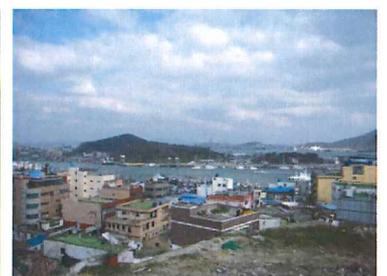
李蘭影の樹木葬 ↓



さらに驚いたことに、公園には李蘭影の樹木葬があったのである。李蘭影は1965年にソウルで死去した後、近郊の京畿道坡州市の龍尾里共同墓地に埋葬されたが、没後40年後の2006年に故郷である木浦に遺骨が移され、この三鶴島に樹木葬の形で新たに埋葬されたのだという。木浦市長の言葉とともに「木浦の娘『李蘭影』故郷の懐に帰って来た」と書いてあった。



今回の旅では「木浦の涙」に改めて思いを馳せながら2つの歌碑を見られただけでなく、思いがけず李蘭影のお墓参りも出来、とても感慨深い旅となった。



# 木浦の涙

## 목포의 눈물

문일석 작사  
손복인 작곡  
이난영 노래

트로트

사 -- 공 -- 의 --

뱃 노 --- 래 가 - 물 - 거 - 리 - 면

- 삼 학 - 도 --- 파 도 - 깊 --- 이 -

스 며 -- 드 는 -- 데 - 부 두 의 새 - 악 --

--- 아 롱 젓 은 옷 자 --- 락 - 이

별 의 눈 물 -- 이 나 목 포 - 의 -- 설 --- 음 -